ブーニン『アントーノフのりんご』

——人称形態の用法の合目的性について——

加藤　敏

本稿は、ブーニンの『アントーノフのりんご（Антоновские яблоки）』における人称形態の特殊な用法を説明することを目的とする。

1．『アントーノフのりんご』の諸研究における理解

1．1．「過去」と「記憶」

D.J.Richards の論文 "Memory and time past: a theme in the works of Ivan Bunin" の標題に既に示されているとおり、ブーニン（1870-1953）の創作を理解するとき、「記憶」と「過去」という概念が重要な鍵となっているように思われる。実際に、長編『アルセーニエフの生涯（Жизнь Арсеньева）』（1927-1929, 1933）まで、多くの作品が、語り手が過去を回想するという形式で書かれており、また、1920年にパリに亡命した後にも、ロシアを、それも恐らく19世紀のロシアを舞台とした作品が記憶を基にして多く創られている[1)]。

作家のこのような基本的方向は、その全生涯を俯瞰的に眺めたときに得られる図式であるが、さて、この方向を決定的にしたのが、既に В.И.Афанасьев によって指摘されているのであるが（Афанасьев/41）、1900年発表の短編『アントーノフのりんご』の執筆であったのではないかと思われる。この作品以前に、ブーニンはこの作品ほど過去を丹念に描写した作品を発表していないのに対し[2)]、この作品の後約10年間、『村（Деревня）』（1909-1910）を執筆するまでの間に書かれた作品は、多くが一人称単数の主人公による過去の回想という形式を採っている。また、この『アントーノフのりんご』という作品に関する諸研究における理解も、基本的にこの線に沿ったものとなっており、つまり、この作品は去り行く、もしくは過ぎ去ってしまった貴族制度とその中での生活という過去に対する葬送歌であるという見方が一般的であるようである。まず、 Афанасьев を見てみると、次のような指摘がある（Афанасьев/46-47）。

> 形式的にはまとめられてはいないけれど、1900年から1901年にかけての彼の諸作品は、深い内的な統一性を保っている。その統一性とは、それらの作品に一貫している基本的な気分（настроение）によって規定される。

それではこの気分とはどのようなものであろうか。まず第一に、それは過去へと去りつつある、幸せな、気楽な、そして伝統的な地主貴族の生活様式に対する哀惜の念であり、暮らしに強引に侵入してくる新しい工業の発展を前にした困惑である。この工業発展は、自らの進行方向にある、前進を阻もうとする障壁や障害物を全て容赦なく掃き散らす。新世紀における資本主義の急激な成長は、階級としての貴族の存在自体を危険な状態にさらしたのである。ブーニンはこの貴族階級と密接に結びついており、このため、特に魅力的に見えるようになったのが、過去へと去り行こうとしている、幾世紀もかけて作り上げられた貴族の生活様式であり、以前ブーニンによって十年に渡り気付かれていたその個々の欠点は、些細な、非本質的なことのように思われ始めたのである。このようにして、貴族階級に対する抒情的な臨終祈禱（лирическая отходная）である『アントーノフのりんご』が生まれたのである。

同様に И.М.Кучеровский によっても、『アントーノフのりんご』は「過去に対する、もう過ぎ去ってしまった、あるいは過ぎ去ろうとしているものに対する墓碑銘（эпитафия）である」と表現されており（Кучеровский/55）、また、佐藤清郎氏もこの時期のブーニンのロシア人観を「牧歌性」という語で示し、『アントーノフのりんご』に「滅び行く生活の中にどっぷりつかること」の「快感」を見ている（佐藤/280）。

1．2．「記憶における過去の詩的な変容」

ところで、創作における記憶の役割に関する作家自身の発言が Richards の論文の中で紹介されている。まず、 Richards はブーニン作品における過去の重要性に着目し、それを四つの論拠に分けて解明しているのであるが、彼はその三番目で次のように述べている（Richards[a]/161）。

第三に、そして最も重要なことなのであるけれど、ブーニンが過去に魅せられていたことは、彼が生と芸術における記憶の役割をどう見ていたかというその見方と、密接に関連していた。彼にとっては記憶とは、この上ない重要性を持った現象なのである。つまり、「一人ひとりの人間の生の極みは、その生についての記憶であり、そう、柩の上で人に約束される最高のもの、それは永遠の記憶なのだ」[3]。記憶とは、時および死という猛威から身を守る人間の防御手段である。

このように、記憶の重要性を強調した後、 Richards は記録係の記録と人間の記憶の違い、さらにはその記録と芸術家の記憶の違いを記し、最終的に次のように結論付け、さらにブーニン自身のことばを引用している（Richards[a]/163）（次の引用は、最初が Ricahrds の本文、二番目は Ricahrds がブーニンから引用した部分）。

> いずれにせよ、記憶という飾いにかけられた過去は、必然的に改変されているのであり、あるいはブーニンのことばで言うと、変容され、詩化されているのである。

> あの年齢の人々が遠い昔のことは思い出すけれど、最近のことはほとんど覚えていないことについて、それはその年齢の弱点であるかのように言われる。しかし、これは弱点ではなく、ただ最近のことはまだ記憶に値しないというだけであり、――つまり、まだ変容しておらず、何か伝説的な詩情という衣をまとっていないのである（не преображено, не облечено в некую легендарную поэзию）[4]。（強調は Richards による）

さらに、 Richards はブーニンの多くの作品を、ブーニン自身のことばを借りながら、「記憶における過去の詩的な変容（поэтическое преображение прошлого в памяти, a poetic transfiguration of the past in memory）」[5] と特徴付けられるとしている（Richards[a]/163）。このように、 Richards により「詩的な変容」という概念が強調されているのであるが、彼によると本稿における研究対象である『アントーノフのりんご』においても、まさに記憶の中で変容された過去が描かれているということにされている（Richards[a]/164-165）。

2. 『アントーノフのりんご』における人称形態の用法の特殊性

しかし、そもそも真の芸術作品は一通りの理解で尽くされてしまうようなものではないと思われるが、『アントーノフのりんご』にもやはり、これだけでは説明できないものが多々あり、その一つが人称形態の用法である。拙論により既に示されているとおり、同作品においては人称形態の用法に厳密な原理が働いている。つまり、一人称単数が現在の語り手を指し、一方、過去の幼年時代の語り手は二人称単数によって指示されているのである。より正確に言うと、過去の語り手が二人称単数の人称代名詞によって直接指示されることは少ないのであるが、その行為が動詞の現在二人称単数の形態によって表されているのである。さて、二人称単数が幼年時代の自分自身を指し示すために効果的に用いられている――もしかすると最初の――例は、トルストイの『幼年時代（Детство）』（1852）

の、特に作品の表題と同一の名を冠された「幼年時代（Детство）」という章に見出すことができる。けれど、もちろん『アントーノフのりんご』とは異なり、「幼年時代」においては一人称単数と二人称単数の用法に一貫した原理が働いているわけではなく、過去の語り手は一人称単数および二人称単数の両方で交互に指示されている。ちなみに、A.M.Пешковский は「幼年時代」における二人称単数の例を引用し、このように二人称単数という形態で表現されるのは、「深く親密な（интимный）性格を持った純粋に個人的（личный）な事実」であるとしている（Пешковский/375）[6]。この Пешковский の指摘に現れているヒントとなるであろう概念は、「親密さ（интимность）」および「個人性（личность）」である。けれど、『アントーノフのりんご』における人称形態の用法の原理を説明するには、これらでは不十分である。Пешковский が説いているのは、二人称単数の用いられる一般的条件のみであり、したがって、『アントーノフのりんご』における二人称単数そのものの機能だけなら、この説明を当てはめることができるであろう。しかし、本稿で問題とするは、あくまでも一個の全体としての『アントーノフのりんご』を創作するにおいて、ブーニンが人称形態の用法に厳密な原理を適用したということであり、さらに進めて、その必然性あるいは合目的性である。

3．生の瞬間的な成長あるいは変化

それでは、何故ブーニンは『アントーノフのりんご』において人称形態に関し同様の原理を適用したのか。それはこの作品を創作することにおける作家のもうひとつ別の主題が、語り手（＝作家）自身を――あるいは自己自身の生を、さらには生一般を――瞬間的な成長あるいは変化という様相において認識し、それを表現することであったと仮定すると説明がつく[7]。言い換えると、ブーニンはロシアの牧歌的な風景を描写するのみならず、その中で育った人間の成長あるいは変化を記録しようとしていたのではないかと思われるのである[8]。

ブーニンは後に『日々の源にて（У истока дней）』（1906）や、さらには長編『アルセーニエフの生涯』といった、一人称単数の視点から見た幼児や少年の精神的および肉体的成長を記録した作品を書いている。また、Richards は先程触れた「記憶における過去の詩的な変容」という概念に含まれる詩的ということばの意味を、ブーニンが詩人として創作を始めたという事実を念頭に置いて考察しながら、次のように説明している（Richards[a]/164）。

> ブーニンの芸術は抜きん出て抒情的であり、自己中心的であり、内省的である。彼が卓越しているのは社会や政治や歴史の記述においてではなく、自己分析においてである。過去を叙述するとき、ブーニンが気に掛けているのは

歴史的な正確さではなく、過去を凝視するととによって彼（もしくは主人公）の中に沸き起こる気分なのである。

つまり、 Richards によって次のことが指摘されているのである。ブーニンにとっては自己というものが重要なのであり、自己を取り巻く――あるいは取り巻いていた――世界を描写するにおいても、世界を描くことが第一の目的ではなく、その中にいる自己自身や自己の気分を表現することの方に心が向いていたと。この指摘が正しいとすると、『アントーノフのりんご』においても、自己の成長あるいは変化を認識しそれを表現することがもうひとつの主題であるという命題の正当性を認めることができるであろう[9]。さらにまた、 Richards は論文 "Bunin's conception of the meaning of life" の結論として、ブーニンの生の意味に対する見解が、プーシキン以降のロシア文学史においてどれほど特異なものであるか示しているが[10] (Richards[b]/170-172) 、単純な発想であるが、生の意味を考えるには、まず第一に生を、その担い手である自己を直観し、それを取り囲む状況を理解しなければならないであろう。

このように、『アントーノフのりんご』を含む上で挙げた諸作品では、語り手（＝作家）の――さらには人一般の――生が作家自身によって観察されているのであり、さらに、先に触れた「記憶における過去の詩的な変容」という概念を考慮に入れると、『アントーノフのりんご』は、成長しつつある自己とそれを取り巻く世界が記憶の中で詩的な変容を受けた結果創り出された作品ということになる。

4．人称形態の用法の合目的性

ところで、『アントーノフのりんご』では一体どこに語り手の瞬間的な成長あるいは変化が表現されているのか提示しなければならない。そして、まさに人称形態の用法を司る原理にそれが隠されているのである。拙論において既に示されているので、ここでは簡単に作品の構成を紹介する。『アントーノフのりんご』は四つの章から成り立っているのであるが、第一章から第三章までで過去の語り手の幼年時代が描かれる。そこでは、様々な光景が描写されるのと同時に、語り手自身の行為が動詞の現在二人称単数形によって表される。一人称単数が用いられるのは稀で、それも《вспоминается мне》や《помню》といった、語り手が回想をしているということを読者に知らせる表現が、ときおり挿入される場合のみである。そして、最後の第四章では現在の語り手の暮らしが描かれる。この章では基本的に一人称単数が中心的な位置を占めることになる[11]。さて、注目したいのは第三章の最後の部分で、そこでは本来であれば二人称単数が用いられるはずなのに、一人称単数が用いられているのである。つまり、第一章から第三章まで過去の語り手は必ず二人称単数によって指されていたのに、まさにこの部分で一人称単数が用いられ、その一貫

性が崩されるのである。

> И старинная мечтательная жизнь встанет перед тобою... Хорошие девушки и женщины жили когда-то в дворянских усадьбах! Их портреты глядят на меня со стены, аристократически-красивые головки в старинных прическах кротко и женственно опускают свои длинные ресницы на печальные и нежные глаза... (т. 2, с. 190)
> そして昔からの夢見がちな生活が目の前にむっくりと起き上がる・・・。可愛い女の子、綺麗な女の人が、昔は貴族の屋敷で暮らしていたのだ！ その肖像画が壁から私を見つめている。昔風の髪型で、洗練された美しさを持つ顔は、従順そうに女らしく、その長いまつげを悲しげで優しそうな目の上に落としている・・・。

引用の一行目には《тобой》という二人称単数の人称代名詞が用いられているが、この二人称単数という形態は第一章から第三章のこの部分まで一貫して過去の語り手自身を指示している。ところが、その直後では《тебя》が予想されることろに、一人称単数の人称代名詞《меня》が現れているのである。そして、第三章はこれで終わり、現在を描写する、現在の語り手が一人称単数で描かれる第四章へと移るのである。つまり、このときに二人称単数的な、トルストイの「幼年時代」に描かれていたような幸福な時が終わり、現在の自己と同一である自己が誕生したということが描かれている。ある意味で、『アントーノフのりんご』の全てはこの一瞬に集約されているのである。

以上、この構成方法を考慮すると、筆者には『アントーノフのりんご』においてブーニンは去り行く過去ばかりでなく、自己の瞬間的な成長あるいは変化をも記録しようとしていたように思えてならない。また、反対に言うと、自己の瞬間的な成長あるいは変化を記録するという目的のために、一人称単数と二人称単数という人称形態の対立が利用されたのであり、したがって、『アントーノフのりんご』における人称形態の用法は、この意味で合目的的なものであったと言うことができるのである。

——注——

1）これは文学史的には必然的なことであったと言えるかもしれない。零落していたとはいえ、貴族の家に生まれたブーニンにとって、資本主義的で、工業化の進む20世紀は決して理想的な時代ではなく、文学史的にも彼がトルストイを中心とする19世紀ロシア文学の伝統に魅力を感じていたということは、容易に納得でき、また、20世紀初頭の文学的環境において、つまり、同世代や自分より若い世代の作家の中で、作家としての自己の立場

を確保しなければならないとき、彼が過去に固執する道を選択したのは、必然以外の何ものでもないであろう。

2）もっとも、ブーニンにより1887年に書かれ、ノートに清書された散文として『ひばりの歌（Песня жаворонок）』というのが紹介されている（Литературное наследство, т. 84, кн. 1, с. 133-135）。『アントーノフのりんご』において、アントーノフ種のりんごの香りが回想のきっかけとなっているのと同様に、この『ひばりの歌』では、ひばりの囀りという音が、回想を促す動機となっている。この作品は『アントーノフのりんご』の先駆けとして、また、将来の作家を予想させる若き日の閃きとして、非常に興味深い。

3）これは『夜（Ночь）』（1925）からの引用されたもの（т. 5, с. 307）。

4）ブーニンのメモからの引用（т. 9, с. 366）。

5）同上。

6）さらに Пешковский は次のように言っている（Пешковский/375-376）。つまり、「何らかの体験がより親密なものであればあるほど、話し手にとって全員の前でそれを陳列するのがより難しいものであればあるほど、話し手は進んでその体験を普遍化の形式に包もうとする（･･･）」と。

7）瞬間性という概念は、後にブーニンにより『日射病（Солнечный удар）』（1925）などにより、その表現が示される。ちなみに、佐藤氏はこの概念を「一過性」という語で表している（佐藤/125-126）。

8）『アルセーニエフの生涯』の冒頭のブーニンによる引用を、参照してもらいたい。「ものごとは書かれなければ、闇に覆われ、忘却という棺に身を委ねるけれど、書かれれば、魂を与えられたようなもの･･･」（т. 7, с. 7）。ここでは書くという行為、記録するという行為の重要性が説かれているのであり、ブーニンにとっては、この書くということ自体――記録するということ自体――も非常に重要なことだったのかもしれない。また、『いたずら書き（Надписи）』（1924）に出てくる登場人物のひとりである老人のことば、「人間は考える動物であると言われている。けれど、もっと正確に言うなら、人間は書く動物だ」（т. 5, с. 172）も、ブーニンにとって書くということが重要であったことを物語っていると言うことができるかもしれない。ちなみに Richards は後者を引用した後、「書くことによって人間は過去を記録し、将来に向けてその記憶を保持することができるのである」と言い、記憶に関連して記録の重要性を指摘している（Richards[a]/162 ）。

9）また、二人称単数が「親密さ」というニュアンスを作品にもたらすために有効であったのと同様に、一人称単数が「気分」という主観的なものを表現するにあたり合目的的であったと言うことができるであろう。

10）参考までに触れておくが、 Richards は同論文を次のように締め括っている。つまり、「（･･･）彼の芸術は、他のいかなるロシア人作家の芸術よりも、究極的には生の情緒的な肯定であり、崇拝という常に感謝の念に満ちた行為であった。そして、生と芸術に

対するこの肯定的で献身的な感応の中に――この感応は全ての懐疑論と生の意味についての全ての無益な哲学的議論に、圧倒的な力で打ち勝つのである――、ブーニンの独自で、特有の、そして他に類のない魅力があるのである」と。この生に対する情緒的な肯定の表現は、『アントーノフのりんご』においても何度か繰り返されている。その例として、「暗い空に流れ星が炎のような線をいくつも引く。しばらくの間、たくさんの星座で彩られている空の暗く青い深みに見入る。それは足の下で大地が流れだすまで。そのときには急いで飛び起きて、手を袖の中に隠し、家まで並木道を急いで駆けだす・・・。何て寒くて露も気持ちよく、この世に生きるって何ていいことなんだ！」(т. 2, с. 182) などが挙げられよう。

11) 第四章の後半部分では三人称単数で語り手自身が示されている。ブーニンは『村』を境に、一人称単数から三人称へと主人公を指示するために用いる人称形態を換えているが、その先駆けとしてこの第四章における三人称単数は興味深い。ただし、これに関しては別のところで考察したい。

――テキスト――

И.А.Бунин, Собрание сочинений в девяти томах, изд-во Художественная литература, 1965-1967.

――文献――

Richards, D.J.[a], Memory and time past: a theme in the works of Ivan Bunin, Forum for modern language studies, vol. Ⅶ, No. 1, 1971.

―――[b], Bunin's conception of the meaning of life, The slavonic and east european review, vol. L, No. 119, 1972.

Афанасьев В.И., И.А.Бунин, очерк творчества, 1966.

Кучеровский И.М., И.Бунин и его проза, 1980.

Литературное наследство, т. 84 , кн. 1, 1973.

Пешковский А.М., Русский синтаксис в научном освещении, изд. 7-е, 1956.

佐藤清郎, 『孤愁の文人――ノーベル賞作家ブーニン――』, 1990.

加藤敏, И.А.ブーニン「アントーノフのりんご」について, 『ロシア語研究 No. 6』, 1993.